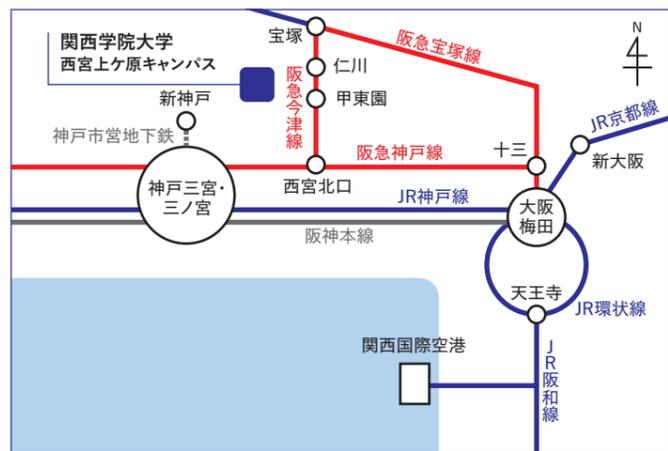


SCHOOL OF SOCIOLOGY

学部読本

アクセスマップ



関西学院大学

社会学部

TEL.0798-54-6202 〒662-8501

兵庫県西宮市上ヶ原一番町1-155



社会学部
サイト



関西学院大学
公式サイト



SCHOOL OF SOCIOLOGY



 関西学院大学

社会学部

学部読本



社会を知って、“わたし”が変わる

いま、“わたし”はひとりで立ち、これからの人生を選ぶ。

だけど縛られている、「世の中の普通」に、「周囲の期待」に。もしかしたら「主体的に決めよ」という時代の要請にも。

“わたし”は、本当は何がしたい？ “わたし”とは何か？

——そう思ったら、あえて“わたし”から離れ、「社会」に視点を向けてみよう。

「社会」はどこにある？

家庭、学校、職場、地域などにあるのはもちろんだけど、それだけじゃない。たまたま電車に乗り合わせただけの人々にも、雑誌や広告のなかにも、もっと抽象的な物事の仕組みや「～すべき」という価値のうちにも、暴力や環境破壊に反対する人々の行動にも、「社会」はある。

つまりそれは、“わたし”の外で、人が関わる場所なら、どこにでもある。

「社会」には、人がいる。人と人との交流がある。役割があり、集団をなす。集団と集団が互いに関わる。制度があり、制度の矛盾があり、矛盾を調整する仕組みがある。それは時代や地域によって変わり、うまく行ったり行かなかったりする。

「真理はあなたたちを自由にする」

(ヨハネによる福音書 8章32節)

——これは、関西学院大学社会学部が1960年の創設以来掲げてきた聖句です。本学部は日本でもっとも歴史のある社会学部として、社会の仕組みを理解し、社会をよりよいものにしていく人々を育成することを目指してきました。スクールモットーである“Mastery for Service(奉仕のための練達)”に倣い、社会課題の解決を図り、社会に貢献することのできる人物を輩出することが、社会学部の目標です。

“わたし”はそんな「社会」のなかに生きている。社会学を学んでも学ばなくても、それは変わらない。

だけど社会学を学べば、「社会」のなかに生きる自分や、自分を包んで広がる「社会」を、少しだけ距離を取って「眺める」ことができるようになる。

「数字」と格闘すれば見えてくる。——自分や身近な人が「あたりまえ」だと思っていた価値は、じつは特定の社会階層に特徴的なものだったのかもしれない。

調査を通じて発見する。——あの人々が従っているルールは、傍から見れば奇妙だけど、当事者にとっては大切な意味があるんだな。

資料を読み込んで知る。——「常識」は10年で変化するのに、不思議とある面では、100年前と変わらなかったりするものだ。

「正解」のない時代。そんな知的興奮を味わった人は、どんな道に進んでも、批判と共感の精神をもって重要な課題を発見し、取り組み続けていこう。

社会を知ると、“わたし”がわかる。“わたし”が変わる。

それはきっと、社会が変わる第一歩だ。



未来を拓く学びがある

「100年に一度の変化」が、10年に一度は起きる時代。そんな変化の時代に求められているのは、自分自身の「常識」を一步引いた視点で見つめ直し、何が課題なのか、どのように解決すべきなのかを自分の頭で考えぬく意思だと、私たちは思います。社会学部の「未来を拓く学び」をご紹介します。

社会学部で学べること

実践的なフィールドワークや最新のデータ分析手法を駆使しながら、現代社会の複雑で多層的な仕組みを解き明かしていくのが、社会学部での学びです。メディアの影響、文化の多様性、人間心理の機微など、複数の視点から重層的に社会を捉え、自分なりの「問い」を立てたうえで、その答えを粘り強く導き出す力を養います。

社会学部のカリキュラムを通して身につく、多様な視点から物事を考える姿勢は、常に新しい価値創造が必要とされる現代社会で広く求められるものです。メディア、広告、マーケティング、企画、営業など、あらゆる業種・職種で要請される専門的知識や実践的な経験を在学中に得ることができます。

▶ 就職率

5年連続 **99%**

▶ 主な就職先

読売新聞、関西テレビ放送、キーエンス、サントリーホールディングス、関西電力、丸紅、ANA(全日本空輸)、西日本旅客鉄道、リクルート、NTTドコモ、三菱UFJ銀行、東京海上日動火災保険、ジェシービー、都道府県庁・市役所、総務省、裁判所、教員

詳しくは [P.21](#) へ

— INTERVIEW | 学生の声

ゼミや学生団体で、知見を広げながら成長中

大学では、自分が履修する授業(曜日や時限)を自分で選択したり、アルバイトを始めたりするなど、時間の使い方の選択肢が広がることで、何に時間を費やすか、誰と一緒に活動するかといったことの重要性を感じるようになりました。1年生から所属している「NPO法人BrainHumanity」という学生団体での小学生対象イベント企画や、大学でのゼミ活動を通じて「誰かと一つの目的に向かって活動すること」の意義を学び続けています。

面白いと感じた科目は?

「社会心理学各論C」では、モノを買うという日常行為に対して、売り手と買い手で展開される心理的活動を自分の経験に照らしながら学ぶことができ面白いです。

社会学部の学生の印象は?

学内外で興味関心を広げ、それらの実践的な経験を通じて、自己の関心を深め、学びを広げる努力を惜しまない姿勢こそが社会学部生の特徴だと思います。



兵庫県立宝塚北高等学校出身
菅田 渚紗さん 4年



社会学部の特徴

Feature 01

入学後にじっくり見極める 最先端の専門教育



社会学部の特徴は、入学後に専攻を選択できる点です。基礎的な学びで自分の興味を見極めた後、3年次から所属するゼミに応じて専攻が決まります。データ分析やフィールドワークなど社会学の専門家はもちろん、文化人類学・民俗学、社会心理学など隣接分野の第一線で活躍する教員も所属しているのは、関西学院大学社会学部ならではの強みです。

社会学専攻

現代社会を多角的に分析し、社会問題の本質を探究。フィールドワーク、データ分析に加え、社会調査士の資格取得を支援する充実したカリキュラムを展開しています。

メディア学専攻

情報化社会におけるメディアの役割や影響を探究。メディアで発信されるメッセージの読み解きを軸にしながら、人とメディアの関係を総合的に考える力を養います。

社会心理学専攻

人間の思考、感情、行動と社会の関係を科学的に分析。実験心理学の手法を用いた研究や、観察・質問紙調査を通じて人間の心理と行動についての理解を深めます。

文化学専攻

多様な文化現象を歴史的・比較的視点から考察。日常に根ざした文化から芸術、映像までを研究対象に現代文化を読み解き、新たな文化的価値創造について探究します。

Feature 02

「世界市民」を育てる 英語教育



文化的な多様性を尊重しながら、他者との関係を築くことができる「世界市民」の育成を目指す関西学院大学。社会学部では、年次や習熟度に合わせて充実したカリキュラムを用意しています。また、交換留学や中期・長期留学に加えて、本学とカナダのマウント・アリソン大学の2つの学位を5年間で取得できるダブルディグリー留学を実施。さらに留学の準備や帰国後の学びの継続、国際交流に関心がある学生を対象に、専攻横断プログラム「Global Program in Sociology (GPS)」を提供します。グローバル社会の第一線で活躍する力を身につけることが可能です。 [GPSについて詳しくはp.08へ](#)

基礎

English Communication

1年次に受講する「English Communication」では、①All in English、②少数、③社会学部の学びに即した内容、④コミュニケーション力向上の4点を重視。2年次以降は、より少ない人数で実施される「English Communication Advanced」で、さらに高度なコミュニケーションに取り組みます。

発展

Sociology in English “英語で学ぶ社会学”

社会学の基本的な概念や専門用語を英語で学ぶ科目です。英語によるプレゼンテーションやディスカッションを通して、社会学に関する多彩なトピックを学ぶ経験は、海外留学やグローバルなプログラムへの参加、大学院進学などを目指すうえで大きなステップになります。

Feature 03

6つの領域から社会にアプローチ 専攻横断プログラム

詳しくは [p.08](#) へ

専攻を横断するユニークなプログラムが用意されています。修了者にはデジタル証明書(オープンバッジ)を授与。変化の激しい時代に、将来を見据える指針となるような知識と経験を提供しています。

4年間の学びの流れ

社会学部では1学科制をとっており、2年生までに4つの専攻の基礎を幅広く学ぶことができます。
2年生の秋に選択する「研究演習(ゼミ)」によって専攻が決まり、3年生からは全員がゼミに所属し、専門的な内容をより深く学んでいきます。
4年間を通じて、専攻の枠を超えた学びが可能で、多角的な視点を養うことができます。

	1年次 入門科目	2年次 基礎科目	3年次 発展科目	4年次 卒業論文
専攻共通の科目 すべての専攻で履修する必要のある科目です。	入門科目 社会学研究入門 文化学研究入門 メディア学研究入門 社会心理学研究入門	演習科目 研究入門演習	演習科目 研究演習I	演習科目 研究演習II 卒業論文
リサーチ・メソッド科目 社会を調査・研究するための考え方と方法を学ぶ科目です。	リサーチ・メソッド入門科目 社会調査入門(概論) 社会調査入門(集計) 社会調査入門(企画)	リサーチ・メソッド基礎・発展科目 データ分析(基礎) 質的研究法 データ分析(応用) 社会調査実習	専攻ごとの研究法・調査法に関する科目 メディア学研究法 文化学調査法 フィールドワークの技法 心理調査法 ディスコース研究法	

専門基礎科目・専攻科目 それぞれの専攻の専門的な内容を学ぶ科目です。

社会学専攻

社会学原論A・B	地域社会学A・B	ジェンダーとライフコースの社会学	記憶と文化の社会学	人権・差別問題論
社会学史A・B	比較社会論	数理社会学入門	観光社会学	インクルージョン・スタディーズ入門
社会思想史A・B	情報社会論	数理社会学応用	NPO/NGOの社会学	現代社会と差別
社会史A・B	地球社会論	計量社会学	ボランティアの社会学	社会問題論
歴史社会学	グローバリゼーション論	社会意識論	社会的ネットワーク論	エスニシティ論
家族社会学A・B	リスクの社会学	格差の社会学	ソーシャル・キャピタル論	障害学
ジェンダー論	科学・技術の社会学	社会調査の実践	学校の社会学	福祉社会学
宗教社会学A・B	産業社会学	ソーシャル・データサイエンス入門	教育社会学	医療社会学
文化社会学A・B	仕事の社会学	ソーシャル・データ・アナリティクス	現代若者・子ども論	身体技法論
法社会学A・B	労働とジェンダー	環境社会学	社会運動論	スポーツ社会学
政治社会学A・B	国際比較の社会学	村落社会学	セクシュアリティ論	社会学発展研究 など
都市社会学A・B	宗教とジェンダー	災害社会学	クィア・スタディーズ	

※2025年2月時点での予定です。名称その他は変更になることがあります。

社会学部では、4年間を通して少人数の演習科目が開講されています。
また、社会調査に関する科目も基礎からしっかりと学ぶことができます。

メディア学専攻

メディア・リテラシー	メディア産業論
コミュニケーション論	メディア文化論
マス・コミュニケーション論	異文化コミュニケーション論
ポピュラー・カルチャー論	ジャーナリズム論
広告・PR論	メディア史
カルチュラル・スタディーズ	メディア学発展研究 など
公共圏とメディア	
ソーシャルメディア論	

社会心理学専攻

社会心理学A	社会心理学各論A
社会心理学B	社会心理学各論B
心理学入門	社会心理学各論C
グループ・ダイナミクス	社会心理学各論D
意思決定の心理学	基礎心理学実験
ゲーミング社会心理学	社会心理学実験
環境社会心理学	基礎心理統計
臨床社会心理学	応用心理統計
文化心理学	社会心理学発展研究 など
災害の心理学	

文化学専攻

文化人類学A	食文化論
文化人類学B	ツーリズム文化論
現代民俗学A	ミュージアム文化論
現代民俗学B	パフォーマンス文化論
社会言語学A	ポピュラー音楽論
社会言語学B	ファッション文化論
キリスト教と文化	文化遺産論
死生学と宗教	表象文化論A
文化解釈学	表象文化論B
比較文化学	表象文化論C
視覚文化論	文化学発展研究 など
文化コーディネーター論	

先輩たちのキャンパスライフ



第一学院高等学校出身
森田 はつきさん 2年

勉学と部活動を両立し、新たな挑戦を続ける日々

社会学は学びの幅が広く、自分の興味さえあれば、どんなことでも学びにつながることも楽しいです。今まで知らなかった観点からの分析や興味がなかった分野の新たな魅力を発見できた時はとてもワクワクします。
私は馬術部に所属し、月曜日以外は毎朝部活動に参加してから授業を受けています。部活と学業の両立は大変ですが、好きな事にチャレンジできて、

興味のある学問を学ぶ環境はとても充実しています。また、大学図書館の雰囲気が好きで、お気に入りの場所の一つです。馬術部の休みに合わせて月曜日の午前中に授業を受けた後に、学内に来ているキッチンカーで好きなご飯を食べ、図書館で課題に取り組むことが楽しみとなっています。



福山暁の星女子高等学校出身
池田 愛佳さん 3年

学部で得た知見をボランティアで実践し、学びを深める

1年生の時は、関心のある分野や研究したいテーマが定まっていなかったため、必修授業のほかにも心理や文化、福祉、地域などの授業を履修しました。2年生からは、1年生の授業を通して関心の高まったまちづくりや共生、ボランティアなどの授業を中心に履修しており、地域課題の解決策についてグループで考えたり、実際にまちづくりに関わっている方のお話をうかがったりしながら学びを深めています。

また、学内の災害・防災ボランティア団体に所属しており、授業後の空き時間や休日を利用してハザードマップ作成や募金活動、防災イベントへの参加、被災地活動などに取り組んでいます。学内外の学びを結び合わせて実践的に活用できていると感じています。

モデル時間割(1年次)

英語や第二外国語、キリスト教学、入門科目などの授業は、指定されたクラスを受講します。これらの授業スケジュールを確認しながら、空いている時間に、自分の興味・関心に沿って選択必修科目を登録して履修します。

	月	火	水	木	金	オンデマンド型オンライン授業*
I		社会学研究入門	English Communication A		English Communication B	メディア学研究入門
II	選択必修科目 例)マス・コミュニケーション論	選択必修科目 例)ゲーミング社会心理学	キリスト教学A	社会調査入門(概論)		
III	中国語I	選択必修科目 例)文化人類学A			選択必修科目 例)セクシュアリティ論	
IV	基礎演習A			中国語I		
V						

※オンデマンド型オンライン授業：あらかじめ配信された授業動画を、自分の都合のよい時間に受講できる形式です。キャンパス内にはWi-Fi環境が整備され、授業の合間など空き時間を活用し、集中して学習できる環境が整っています。

この科目に注目 基礎演習A・B 現代社会を生き抜くための知的鍛錬を始めよう

1年間を通して、問題の発見・明確化、他者との共有・議論、先行研究の収集整理・レポートの執筆・発表という、大学における学習・研究のミニ・プロセスを体験することを目標とします。合わせて、学生間の友人関係の構築、グループワークを通じての共同作業の機会を提供します。これは、大学における学びの基礎を身につけるとともに、生成AIなどのテクノロジーの発展によって単純知的労働のオートメーション化が急速に進行する世界で生き抜くための、自力で物事を考え、他人を説得し、時には他人と協働してプロジェクトを実行していく力を身につけていく第一歩です。



先生たちの研究を覗いてみよう

社会学部の先生たちは、どのような研究を行っているのでしょうか。それぞれが関わっている研究対象や、その醍醐味を語っていただきました。

フィールドから学ぶ

「生きづらさをめぐる対話の場」から見える社会

貴戸理恵 教授

私のフィールドは、不登校やひきこもりなどを経験した人々が集う「生きづらさからの当事者研究会」です。月に一度、10～20人くらいで「がんばりすぎたまう問題」などさまざまな題を立て語り合います。「生きづらさ」とは何でしょうか。かつて「障害者」「女性」などのマイノリティは、集団ごと差別され、その分抵抗のための連帯にも開かれていました。しかし現在では、たてまえ上は「多様性」が認められつつも、実際には差別が続く複雑な状態にあります。しかも「能力がないから」という形で排除されるため、結果は個人で抱え込まれ、連帯も閉ざされがち。この自己責任とされる苦しみ「生きづらさ」の土台にあります。対話の場では、「生きづらさ」に耳を傾け合う中で、「自分だけの問題じゃない」と自己責任が揺らぎ、新たなつながりが生まれることがあります。人と出会い関係をつくりながらの調査は予定通りにはいきませんが、そんな場面に立ち会えるのは、一番の喜びです。フィールドは「偏った、少数の」人々の世界です。しかし、絶えず「価値ある人間であれ」と競争に晒されるしんどさは、現代に生きる私たちみんなの問題ではないでしょうか。局所から「社会」が見える——これがフィールドワークの魅力です。「現場」で生まれる語りや観察記録は、これまで誰も手にしたことのない「一次資料」。生まれたてのほやほやのデータに、あなたもぜひ出会ってみてください。



異文化・多文化から学ぶ

沖縄フィールドワークの旅

島村恭則 教授

私の専門は、民俗学です。民俗学は、ふつうの人々の日常生活文化を研究する学問です。これまでいろいろな場所でフィールドワークを行ってきましたが、中でも、沖縄には30年以上通っています。最初に沖縄を訪ねたのは、大学2年生の時。独自の文化にすっかり魅了され、4年生になってからは、宮古島の村で空き家を借りて住み込みました。そして、祭りやシャーマニズムに関する卒業論文を書きあげました。その後も、沖縄でのフィールドワークは毎年続け、現在では、ゼミ生と一緒に沖縄各地で調査実習を行っています。4泊5日の合宿形式で、ゼミ生はそれぞれ、ウタキ（聖地）、ニライカナイ（海の彼方にあるとされる神々の世界）、墓地と祖先崇拝、祭り、伝説、エイサー、三線とシマ唄、共同売店、食文化、米軍基地文化など、多様なテーマを設定して聞き取り調査を実施。その成果をレポートにまとめます。中には、実習終了後も現地に通い、卒業論文につなげる学生も。一般に、「自文化」としての「日本文化」を扱うのが民俗学、世界の「異文化」を扱うのが文化人類学とされています。沖縄の文化は、日本の古い文化が根強く残るとともに、東南アジアや中国、さらに戦後はアメリカの文化の影響も受けた「チャンプルー（ごちゃ混ぜ）文化」。こうした文化を研究するには、民俗学と文化人類学の両方の視点が有効です。文化学専攻では、民俗学、文化人類学の両方をバランスよく学べるのが特徴。みなさんも、私たちと一緒に文化をめぐるフィールドワークの旅に出かけませんか。



データから学ぶ

SNSデータから社会の意味をあぶり出す

中野康人 教授

私たちの生活はデータで溢れています。日々の勉強、買い物、友人とのコミュニケーションなど、スマホやアプリで情報のやり取りをしています。中でもSNSは現代社会における重要なコミュニケーションの場となり、そこで発信されることばや行動が私たちの社会や個人の関係性に大きな影響を与えています。社会学部では社会調査の方法を学びますが、ネットに流れることば・画像・映像も調査の対象になります。とはいえ、そこでの発言や行動の背景にある意味や意図は、表面的な解釈だけでは理解しきれないことが多いです。しかし、SNS上の情報を大量に収集してデータ化することにより、総体として人々が意識・無意識のうちに表現した意味や価値観を取り出すことが可能です。データサイエンスやヴィジュアルイゼーションの技術を用いると、それまで気づけなかった事実が浮き彫りになるのです。SNSにおける「いいね」や「拡散」といった行動も、単なる支持や共感を越えた社会的なメッセージや政治的な立場を表現する手段になり得ます。社会学の視点を加えてこれらの現象を分析すると、SNSデータを社会の縮図として捉え、そこに潜む力関係や集団のダイナミクスを明らかにできます。既存のデータを学習したAIが新たなデータを生み出し、現実社会に影響を与えるような時代になってきました。人間が自律的に豊かに暮らしていくために、データから社会を見ていくことが重要になっています。



専攻横断プログラム

垣根を越えたテーマ・ベースの学びを実現

社会学部では、ゼミに所属することで専攻を決めて研究を進めていくだけでなく、特定のテーマに沿ってより深く学べる、6つの「専攻横断プログラム」を開設しています。プログラムに定められた科目を修得し、専攻を越えて学びを深め、多角的な視野から社会を見る目を養うことができます。プログラムの修了者にはオープンバッジ(※)を授与します。4年間の社会学部の学びを最大限に生かしたい人にオススメのプログラムです。

※オープンバッジ…各プログラムの規定単位を修得したことを示すデジタル証明書

プログラム一覧

社会調査エキスパート

社会調査から現代社会を生き抜く術を身につける

現代社会は、フェイクニュースがあふれており、そのためファクトチェックが求められています。そこで社会を正しく知るための大事な方法の一つが、社会調査です。しかしアンケートや社会調査もまた世の中に数多くあり、何が事実なのかをすぐに理解することは難しいのです。本コースでは社会調査の方法を身につけることで、調査を実施する力、調査結果から事実を読み解く力を養っていきます。

ソーシャル・データサイエンス

文系だからこそそのデータサイエンス

いま、データサイエンスへの注目が高まっています。文系なのにデータサイエンス?と思われるかもしれませんが、このプログラムでは、社会学部ならではの「自分で調査ができるデータサイエンス」を目指します。社会調査士資格の取得に加えて調査設計や調査倫理を身につけ、加えてプログラミングと統計の基本を学ぶことで、企画力に結びつくデータ活用方法を学びます。

文化コーディネーター

「文化のプロ」の育成

デジタルメディアの発達の中で多様に展開する現代文化の捉え方を、コーディネーター(構成、編集、発信、応用)の観点から実践的かつ理論的に学ぶプログラムです。文化コーディネーター論、ツーリズム文化論、文化遺産論、ミュージアム文化論などの科目から構成され、文化産業、文化行政、キュレーション(博物館実践)、地域づくり、文化観光など「文化のプロ」を育てます。

Global Program in Sociology

Think globally. Discover the world.

The Global Program in Sociology (GPS) prepares you to become a world citizen who can communicate across language barriers, think creatively about social issues, and be open-minded toward cultural differences. Through language courses, study abroad programs, international internships, and cultural exchange activities, you will develop practical skills for a variety of careers. If you are curious about the world, this program is perfect for you!

インクルージョン・スタディーズ

多様性が尊重される社会を目指して

多様性とは何でしょうか? セクシュアリティ、エスニシティ、障害の有無などは、平面に並ぶあれこれではなく、多数派/少数派という力関係の中に置かれています。「多様性が尊重される社会」を実現するには、少数派を認めるのみならず、多数派を中心に作られた社会の仕組みや「常識」を問い直さねばなりません。本プログラムでは、複雑な現実を見据え、対話と変革を生み出す知を探究します。

ジェンダー・スタディーズ

ジェンダーから社会を問う

家族や学校、仕事、スポーツなどさまざまな経験は、「女性」と「男性」でどう異なるでしょうか? また、二元的に捉えられない性のあり方は、この社会でどう扱われているでしょうか? 本プログラムは、ジェンダー概念を軸に、多様な現実を「男/女」に二分し「〜だからこうあるべき」と迫ってくる社会的な仕組みを問い直すとともに、性別と結びついて生じる差別や排除について批判的に考えます。

社会学専攻

「当たり前」を問い直す

社会学は、人間社会のさまざまな現象について、「当たり前」を問い直しながら実証的に探究する学問です。価値が多様化する現代では、しばしば「異なる人との共生が大切だ」と言われます。一方で、一人ひとり異なる私たちが、なぜか「共存できてしまっている」のも現実でしょう。それを可能にしているのは、私たちが知らないうちに方向づけ、他者や集団と関係づける何か——「社会」——に他なりません。

社会学専攻では、個々の態度や関係から全体に関わる制度や構造まで、幅広い視点で分析を行います。対象の領域は、グローバル化、ジェンダー、セクシュアリティ、格差、貧困、労働、教育、医療、地域社会、宗教、自己など多岐にわたります。

PICK UP 授業

社会学専攻の特徴的な授業を紹介します

仕事の社会学 ————— 長松奈美江 教授

「働くこと」の過去・現在・未来

みなさんは、日本人の働き方についてどう思いますか？日本では、なぜ学校卒業後すぐに就職することが「普通」とされているのでしょうか？なぜ過労死や過労自殺がなくなるのでしょうか？なぜ男女で働き方が違うのでしょうか？なぜ、働くことによって幸せになれたり不幸になったりするのでしょうか？

この授業では「働くこと」にまつわるさまざまな疑問について、社会科学のツールを用いて多角的に検討していきます。鍵となるのは日本的雇用システムの理解です。「仕事の社会学」で学ぶことで、日々の労働ニュースの裏側にある事実を理解できるようになります。

家族社会学 ————— 村田泰子 教授

「ケア」と「ジェンダー」の視点から家族を捉える

この授業では、現代社会における家族の機能や構造、社会的役割、世代間関係、多様性を深く理解することを目指します。その際、「ケア」と「ジェンダー」という、家族研究とは切っても切り離すことのできない、二つの切り口からアプローチします。しばしば家族は、少数の親密な者同士が集う、私的な領域とされ、育児や介護においても重要な役割を果たしてきましたが、そうした活動のあり方は歴史を通じてどう変化してきたでしょうか。また、家族と家族以外の領域の区別は普遍的と言えるでしょうか。一緒に考えていきましょう。

ボランティアの社会学 ————— 関嘉寛 教授

ボランティアから現代社会におけるコミュニケーションを考える

ボランティアを勉強するというと、ボランティアをうまくする方法やボランティアする人の動機を考えるとされるかもしれません。しかし、この授業ではボランティアから見える社会の特徴を考えていきます。例えば、お金をもらって被災地で片づけをしても、「ボランティアで」片づけをしても、どれも同じ「片づけ」です。ボランティアの特徴は、活動の内容にあるのではなく、私たちのボランティアに対するイメージに由来しているのです。したがって、このイメージを探ることで、ボランティアや現代社会について理解を深めることができるのです。

情報社会論 ————— 鈴木謙介 教授

ネットにとどまらない社会への影響を扱う

私たちの周りには、SNSや動画サイトなどのインターネット技術が身近なものとして普及しています。この講義では、こうした技術を生み出した「情報化」のメカニズムを説明します。情報化は、社会のあらゆるところに関わります。近年であれば「AIの登場」や、それらの「自動化技術」が、人間の仕事を奪うのではないかということも言われています。また、SNSによって広がるフェイクニュースの問題や、それらが選挙結果に影響を及ぼす危険性も指摘されています。情報化を入口に、現代社会を広く理解するのが、この講義の目標です。

社会学専攻 のゼミ活動

フィールドに関わり、社会の「リアル」と出会う

大岡栄美 准教授

大岡ゼミの調査テーマは「つながりの社会学」です。私たちの生きる現代社会は「選択縁」の社会と言われています。かつての社会では家族や親戚、ご近所など、自分では選ぶことができない人たちとの強いつながりが社会の土台になっていました。それが現代では、SNSなどにも代表されるように、自分が選んだ、自分の付き合いたい人だけ、選択的に付き合うことが可能な社会へと変化してきました。個人は自由を手にしたのです。その反面、社会的孤立やコミュニティの弱体化、それに伴う新たな課題が、わたしたちを孤独で、生きづらくしている側面もあります。

ゼミでは、こうした現代社会における社会的つながりの課題と、課題解決に向けた新しいアプローチを、フィールドワークを通して学んでいます。強いつながりに変わる弱いつながり、緩いつながり作りが「どこで」「だれ」によって生み出されているのか。

学びを通じたコミュニティ、ユースセンター、カフェや喫茶店、地域食堂やつどい場、マルシェ、市役所など、さまざまなフィールドでインタビューをし、地域の人と出会い、語りに耳を傾けます。またともに活動する中から、課題解決につながるまちづくり実践として、地域イベントやワークショップを行うこともあります。主に大学のある西宮市をフィールドに活動しています。

大学進学で西宮市に下宿していても、西宮市に通学していても、西宮と出会うことなく卒業する学生も多いので、身近なフィールドワークを通して、自分の暮らす、そして学ぶまちの魅力に気づいてもらうのも、ゼミの調査目的の一つと言えるかもしれません。



INTERVIEW | 学生の声

現地調査を通じて、地域課題の本質を探る

「質的研究法」という授業で、実際に調査する現地の人と関わったことで、自分の生まれ育った地域や普段の生活圏とは異なる場所でこそ新たな気づきがあり、自分を成長させられると考え、大岡ゼミへの所属を選択しました。

ゼミでは、西宮市を活動の拠点として、地域コミュニティの衰退化が顕著な現代社会において、どのように市民交流の機会を生み出し、まちの活性化を図るのかを研究テーマに掲げ、市民のかたへのインタビューやイベントの企画を通して調査・研究を行っています。個人ではなくチームで活動するため、自分にはない考え方やものの捉え方を吸収したり、新しい価値観を生み出したり、互いに刺激的な関係性を築けることも自己成長につながっています。



徳島市立高等学校出身
春藤 麻友さん 4年

社会学専攻の卒業論文テーマ

- サイクル・ツーリズムから考える交流人口から定住人口への移住過程
- 公共空間に求められる市民力と包摂力：
都市公園の商業化から考える新しい公共の形
- 阪神ファンはなぜ弱い阪神を熱く応援するのか？
- 母親の育児不安を生み出す要因：階層、子育て方針(理想)、子育てのあり方(現実)
- 一人暮らしの認知症患者のケアにおける「その人らしさの尊重」とは
- 韓国社会における男性の兵役義務とジェンダー対立の深まり
- なぜ体罰は容認されるのか：体罰を受けた経験を持つ体育会学生の語りから
- 「落語する」経験と落語研究会の「居場所」性
- 入社前から転職活動を見据えている人々
- 美容行動を避ける男性心理の探求

メディア学専攻

メディアと日常生活の密接な関係を学ぶ

今の時代、私たちはさまざまなメディアに囲まれて生活しています。朝起きてスマホでSNSをチェックすれば、友だちの様子や世の中の出来事が手に取るようにわかります。一方リビングのテレビでは、ウェブ動画やサブスクなどを見る機会も増えましたが、まだまだ地上波テレビの番組も流れています。こうした、いつもメディアとつながっているような私たちの生活は、いつからどのようにして始まったのでしょうか。それにより、社会は便利で楽しいものになると同時に、どのような問題や課題に新たに直面しているのでしょうか。メディア学とはそうした社会の現状を、歴史・技術・文化・経済・政治などさまざまな視点から考えていく学問です。

PICK UP 授業

メディア学専攻の特徴的な授業を紹介します

公共圏とメディア

阿部潔 教授

「話し合い」の空間を考える

話し合いで物事を決めましょう。そう学校で教えられます。では、そうしたコミュニケーションは、どこで/だれによってなされているのでしょうか。まず思い浮かぶのはSNSかもしれません。ここでは、さまざまなユーザーがいろいろな話題について自由に意見を交わしています。今では当たり前のメディアを用いた意見のやり取りは、いつから/どのようにして生まれたのでしょうか。この講義では、社会の中で話し合いの場がどのように成立し、メディアの発展とともにコミュニケーションがどのように変化してきたのかを考えていきます。

ポピュラー・カルチャー論

難波功士 教授

メディア×コンテンツ×エンタメ

そもそも「ポピュラー・カルチャー」とは何でしょうか。私はとりあえず、何らかのエンタテインメント性のあるコンテンツ(創作物やパフォーマンスなど有形無形の)と人々が、メディア(さまざまなデバイス、アプリ、プラットフォームなど)を介して、もしくはメディアとともに関係しあっていることと理解しています。要するに、みなさんが日々スマホなどで接し、楽しんでいるもの(こと)、もしくは遊びに行くこと(ところ)のすべて。そこからいかなる社会の変化を読み取り、どのような将来を見通すことができるのかを考えていきます。

マス・コミュニケーション論

堀川裕介 助教

情報メディアの“生態系”をつかむ

新聞・テレビなどのマスメディアを主な対象に、歴史・産業・法制度・文化など多彩な観点からその全体像を描く講義です。伝達効果の異なるメディアが互いに補い合いながら共存している様は、さながら“生態系”です。それらが単なる情報だけでなく、人々の意見や思いを伝達する中で、社会全体としてのコミュニケーション(マス・コミュニケーション)が成立しています。

最近では「オールドメディア」との印象もありますが、むしろインターネットとの共存にも着目しながら、“情報メディアの生態系”がどのように変容していくかをこの講義では追います。

ソーシャルメディア論

松井広志 准教授

ソーシャルメディアと現代社会の関係を考える

みなさんはInstagramやXなどのSNS、あるいはYouTubeやTikTokなどの動画共有サイトを使っていると思います。小説やイラストの投稿サイトを見る、という人もいるでしょう。ソーシャルメディアはこれらの総称ですが、あまりに身近なゆえに、深く考えることは意外と少ないかもしれません。この授業では、ソーシャルメディアについて、より以前からあったマスメディアやパーソナルメディアと何が違うのか、理論的に整理します。また、各プラットフォームの仕組みや、それが促すコミュニケーションについて検討します。さらに、ソーシャルメディアが形成するポピュラー文化についても論じていきます。

メディア学専攻のゼミ活動

メディア産業やコンテンツビジネスなどの現在と未来について考える場としてのゼミ

難波功士 教授

社会学部に入り、メディア学を専攻する学生の多くは、メディア・コンテンツ・エンタテインメントといった領域に少なからず興味があり、そうした業種・業界に進みたいという希望を漠然と抱いていることが多いでしょう。現在、20世紀に君臨していたマスメディアは「オールドメディア」と呼ばれたりもしています。たしかに、特定の組織から広範な人々へと一方的に情報やコンテンツが流れていくだけの時代ではありません。しかし、今世紀急成長を遂げた企業群(デジタル、ネット、モバイル関連)が、既存のメディア各社に完全にとって代わるという状況でもありません。要するに混とんと激動の時期にあります(もちろん、現在すべての業態や職種が、多かれ少なかれそうなのですが)。

ゼミ生には、混とした状況を冷静に分析し、自分はそうした激動の環境を楽しみ、サバイバルしていくタイプの人間なのかを考えてもらいたいと思っています。そのためには俯瞰的に現状を把握す

ることも大切ですが、現役で働いている人の声を聞くことも重要です。機会があれば現場に足をこんでお話をうかがう、Zoomなども活用しながらゼミ卒業生たちに聞き取りを行う、といったこともゼミ活動として取り組んできました。具体的には放送・広告・出版・映画・情報通信など各社に勤務する先輩たちにインタビューするわけですが、それら業界間の垣根が無くなりつつあり、異業種からの参入、もしくは異業種への進出が盛んに試みられている現状が、よりリアルに実感できたりするようです。また他大学のゼミと連携し、企業から現業に即したテーマをいただいて、その企業の方々に学生たちが自ら考えた企画を直接提案するといったイベントにも参加してきました。

ゼミは、大学生が社会に出ていこうとする時期とともにする場です。お互いに刺激しあい、視野を広げ、社会と自身の将来について思考と知見を深めていってほしいと考えています。



INTERVIEW | 学生の声

実践的な学びから、メディアと社会の関わりを考察する

私は、①情報収集に役立つ量的・質的調査などの調査方法を学べること、②身近な社会問題を理解し、社会に対する深い知識を身につけられると思ったことから社会学部を選びました。

特に、現代社会においてメディアは欠かせないものになったと感じ、メディアと社会の関わり方を研究できるメディア学を専攻しています。ゼミでは、アンケート調査の実施やSNSを活用した広告戦略を元に、百貨店と連携して次世代層顧客の年間買上日数を増やすイベントを企画した経験から、情報を得る・届ける手段としてメディアの影響は今後ますます重要になると考えるようになりました。ゼミ活動を通じた実践的な学びにより、社会に対する深い知識の習得につながっていると感じています。



Seolhwa(雪花)高等学校出身
金 ダンビさん 4年

メディア学専攻の卒業論文テーマ

- 若者がBeRealにハマる理由:Instagramとの比較から考える
- クイズ番組は不滅なのか:これまでとこれから
- 現代の若者の「平成レトロ」ブームに関する研究
- 現代社会におけるライブ・エンタテインメントの存在意義:なぜ音楽ファンはライブに行きたいと思うのか
- ファンが「推し」に求める事は何か:時代の変化と共に変容する理想のアイドル像
- 若者とジーンズ:なぜ現代の若者はジーンズを穿かないのか
- 性的マイノリティとインターセクショナリティ:多様性社会の実現に潜む交差性の落とし穴
- 選挙とメディアシフトの関係性:なぜメディアはトランプの当選を予測できなかったのか
- 韓国に向けられた嫌悪と愛好:ヘイトスピーチと韓流ブームが併存する日本社会
- ナショナリズムとアスリートの「物語化」

社会心理学専攻

社会に作られる個人、個人が作り出す社会

人は生まれた時から他人と共にあり、他の人々が作り出した環境の中で生活しています。社会心理学では、人の思考、感情、行動が社会環境によってどのように形成されるのか、またそれらの思考、感情、行動が社会環境をどのように形成していくのかを研究します。例えば、他人の意見にどのように影響されるのか、どのように他人を判断し偏見を持つのか、集団の中でどのように振舞うのか、といったことが学びのトピックとなります。研究方法としては、実験や調査などを通してデータを収集し、データから客観的に人の心を読み解く方法を身につけます。社会心理学を学ぶことで、社会の中での人間の行動の仕組みを知り、日常の中での人間関係を多面的に捉える力を養います。

PICK UP 授業

社会心理学専攻の特徴的な授業を紹介します

社会心理学A・B

清水裕士 教授

人の社会行動を「心」の観点から解き明かす

社会心理学AとBでは、社会心理学の基本的な考え方を半期ずつ学びます。心理学は行動の科学といわれます。しかし、それだけではなく、行動がどのような心のメカニズムによって引き起こされるかを考える学問です。人は時として、自分がやりたくないこと、するつもりがなかったことをしてしまいます。社会心理学では、そのような非合理的な行動を、「それらは実は意味のある行動なんだよ」と説明するための理論を作ってきました。授業では、社会心理学のさまざまな実験結果を紹介しながら、人間行動を科学的に理解するための入口に導いていきます。

グループ・ダイナミクス

森久美子 教授

「集団」を複眼的に眺める

私たちはさまざまな集団に属して生活しています。周囲の意見に流されたり、空気を読んで言いたいことを飲み込んだりする時、集団はひとりの個人では到底かなわない力を持っているように見えます。でも、誰かの発言で流れが大きく変わったり、新しい価値観が古い常識を覆したりすることがあるように、集団の力や「雰囲気」を作り出し変えていくのもまた、一人ひとりの個人なのです。この授業では、集団と個人が「互いに影響を与え合う」現象について取り上げます。個人の視点と集団の視点を切り替えることで、私たちの生きている集団について多様な見方をしてみませんか。

ゲーミング社会心理学

野波寛 教授

ゲーム=抽象化した人間関係や集団間関係

「ゲーム」とは、将棋やオセロからスマホのソシャゲまで、すべからず一定のルールがあり、すべてのプレイヤーがそのルールに従うとの前提で各自が目標達成を競うというのが共通の構造です。

みんながルールを守って競うというこの構造は、身近な人間関係や集団間関係にも、あてはまります。つまり私たちの世界の基本はゲームと同じであり、私たちはゲーム世界のアバターと見ることもできるでしょう。こうした視点をとると、さまざまな研究用ゲーミングの中の個々人の意思決定や行動を分析することで、現実世界での人間のココロの動きを知ることができる——これがゲーミングの社会心理学です。

現実の社会をゲーム化する楽しさ、その中で人間のココロの動きを分析する面白さ、これらを知ってもらえたらと思います。

文化心理学

岩谷舟真 専任講師

心の文化差とその起源を読み解く

私たちの心には文化差があります。成功した時に「頑張ったから」と言う人が多い国もあれば、「運が良かっただけ」と謙遜する人が多い国もあるでしょう。では、なぜ心の文化差が見られるのでしょうか。この授業では「〇〇人だから△△な心を持つ」という同語反復に近い説明からさらに進んで、社会環境の違い（新しく友人を作る機会が多い社会か少ない社会か、稲作が盛んな社会か麦作が盛んな社会かなど）が心の文化差を生み出す可能性について説明します。この授業を受講することで、「〇〇人は△△だ」というステレオタイプの理解よりさらに深い他者理解が可能になると期待できます。

社会心理学専攻のゼミ活動

身近な関係を科学的に研究する

清水裕士 教授

私の研究テーマは社会心理学で、とくに対人関係や態度などミクロな社会行動がテーマです。具体的には、どうすれば友達とうまくコミュニケーションがとれるだろう？ みんながグループで助け合うにはどうすればいい？ 人の好みや印象を知るにはどうすればいい？ などを研究テーマにしています。そのため、清水ゼミでは身近な対人関係やコミュニケーション、人への印象をよくするための方法などについて研究している学生さんが多いです。また、消費者行動について研究する人が毎年数人います。

3年生では、社会心理学の論文の読み方などを学びながら、グループでテーマを決めてみんなで一緒に研究を進めています。リサーチエッセイの立て方、仮説の導き方、そしてデータ分析なども勉強しながら、社会心理学の研究方法を身につけていきます。たとえば、自分の意見がグループの中でどのようにうまく伝えられるのかのトレーニングをしたり、アカデミックな場面での質問の仕方など

も議論したりします。そして、心理学では国際的な研究が多いので英語論文も読みますし、実験計画や統計など科学的な研究に必要な知識も獲得していきます。最終的にはグループの研究成果はゼミ生各自が個人レポートとしてまとめます。その中でアカデミック・ライティングも身につけてもらいます。

4年生では、3年生で学んだことを生かして一人で卒業論文執筆を行います。テーマは比較的自由に選んでもらっていて、日常で不思議に思っていたこと、就活中に気づいたことなどをとりあげている学生が多いです。社会心理学は科学的な方法を使うこともあり、大学生活で学んだことが一つひとつ積み上がって、研究に活用されていくことが特徴です。ゼミでの課題などは大変なこともあると思いますが、ゼミ生はみんな卒業するころには「ゼミではちゃんと大学生っぽくすることができた!」と自信を持ってきています。



INTERVIEW | 学生の声

社会学と社会心理学の両方を学ぶ意義

もともと高校時代に読んだ『群集心理』という本をきっかけに、人と人が関わる時に生まれる心理変遷に興味を持っていたことから、「親密な対人関係」をテーマの1つとする清水ゼミへの所属を決めました。関西学院大学社会学部の社会心理学専攻では、社会学由来の多面的な視点、心理学由来の「こころ」に関する知識、その両方を学ぶことができます。

「社会学を学ぶことでみんなに優しくなれる」という清水先生の言葉は、社会心理学ではさらに意味を持ちます。「こころ」を学び、さまざまな事柄の裏側をも推考することを癖づけられるからこそ、思考にゆとりが生まれます。そのゆとりは、「みんな」つまり「社会」のことを考える機会を増やすほか、自分自身の行動や「こころ」を見直す余地にもなるのだと思います。



淳心学院高等学校出身
吉田 航さん 4年

社会心理学専攻の卒業論文テーマ

- AIのポジティブなフィードバックが自己評価の変化に与える影響
- 謝罪型感謝の研究:「ありがとう」と「すみません」が相手の向社会的行動に与える影響
- マッチングアプリのプロフィールでより多くのいいねをもらうには
- 16パーソナリティの性格タイプが大学生のコミュニケーションスタイルに与える影響
- 有機野菜購入は安心してしかないのか:消費者の環境への志向
- ワーキングホリデー経験が異文化間能力に及ぼす影響
- 現代版幸福尺度の作成と世代間幸福格差の検討
- YouTube動画広告の視聴時間についての研究
- なぜ無謀な賭けをするのか
- 直感的判断は協力行動を促進するのか:囚人のジレンマ・ゲームを用いた実験

文化学専攻

個別と普遍のあいだを行き来しながら、文化や芸術の意味や価値を探る

社会構造の中で人が行う言語的・非言語的な実践としての文化、およびその産物としての芸術に、主に質的データの分析を通してアプローチします。文化は、環境によって異なりを見せる個別具体的な営みであり、また、すべての人類は何らかの文化を実践するという点で普遍的な営みでもあります。ある文化はどのようにその形になったのか、何がどうであれば別の形もありえたのか——こうした問いに個別性と普遍性の両方を意識しつつ迫ることで、文化芸術の意味、価値、可能性について、洞察を深めます。ことば、物語、信仰、慣習、芸能、音楽、食、文化遺産、ファッション、ツーリズム、ミュージアム、パフォーマンスなど、幅広い事象を扱います。

PICK UP 授業

文化学専攻の特徴的な授業を紹介します

文化人類学 ————— 中谷文美 教授

自分たちのあたりまえを問い直す

文化人類学はその名の通り、「人間の「文化」について考える学問です。ここでいう「文化」とは、地球上のさまざまな人々が日々考え、行っているありとあらゆる事柄を指します。持ち運ぶこともできないくらい巨大な石のお金にはどんな価値があるのか？ 贈り物を受け取ったら、お返しをしないといけない気分になるのはなぜ？ 映像資料にもふれながら、世界各地の事例を通じて、日頃考えたことのない問いに取り組むことが、自分たちの日常を新しい視点で切り取る機会につながります。半期の授業が終わる頃には、いつもの景色がちよっとちがって見える…はず！

現代民俗学 ————— 島村恭則 教授

日本とその周辺をフィールドに、日常生活文化の謎を解く

民俗学は、人々の日常生活文化(=民俗)について、その来歴や意味を解明する学問です。年中行事や祭り、昔話や伝説、民間信仰や冠婚葬祭、食文化、都市伝説やネット怪談といった伝承文化を、日本とその周辺地域でのフィールドワークや歴史文献の調査を通して考察するところに特徴があります。講義では、ベストセラーになった『現代民俗学入門』(島村恭則編)をテキストに、現代に生きる私たちにとって身近な民俗をとりあげ、現在と過去、日本と海外を縦横に往復しながら、その謎を解明していきます。

ポピュラー音楽論 ————— 鈴木慎一郎 教授

サウンドをめぐる三題噺——テクノロジー、キャピタル(資本)、メッセージ

20世紀に録音技術が定着してから、音楽は、それがレコーディングされたのとは別の時間や空間においてくり返し再生され聴取される商品となりました。商品としての音楽には必ず何らかの資本が関与します。また作り手や送り手が何らかのメッセージを曲に付与したとして、聴き手には別の解釈を行う余地が常にあります。この授業では、こうしたポピュラー音楽の特質から導かれるさまざまな問いについて考える機会を提供します。さらに授業を通じて、趣味や嗜好を学問することの面白さが伝われば何よりです。

死生学と宗教 ————— ベネディクト 准教授

「死」を見つめることで「生」を考える——心の文化差とその起源を読み解く

死は誰にでも必ず訪れる、避けられない自然な出来事ですが、多くの人は自分の死や他人の死への準備ができていません。では、なぜ私たちは「死」について学ぶ機会が少ないのでしょうか？ この授業では、死に対する不安や、死を通じて見いだされる生きる意味を探ります。宗教は、死の不安を和らげる重要な役割を果たしてきました。死にまつわるさまざまな信仰や儀式を中心に、死の定義、社会的側面、倫理的問題、文化的違いなどを考察します。授業は英語で(日本語を交えながら)行われるので、交換留学生と意見交換するチャンスもあります。

文化学専攻 のゼミ活動

文化について、楽しみつつも冷静に考える

鈴木慎一郎 教授

文化や芸術は(楽しみをみんなで無条件に分かち合う)瞬間を含んでいます。一方で制度化や商業化に向かう動きが含まれることもあります。両者のせめぎ合いに感覚を研ぎ澄ましていくのがこのゼミのねらいです。

このゼミで大切にしている先人の考え方には少なくとも2つあります。1つは「文化とはありふれたもの」(レイモンド・ウィリアムズ)という考え方です。文化とは権威づけられたどこか「格上」のものという先入観があったなら、それを外してみましよう。日常生活にニュアンスを加える営み、といった程度に文化を捉えれば、至る所にそれを感じ取れるでしょう。ありふれているから研究に値しない、のではなくその逆です。もう1つは「限界芸術論」(鶴見俊輔)です。限界芸術とはアマチュアがつくり受け手もアマチュアであるような芸術のことです。これは、純粋芸術(=専門家が作り専門家が鑑賞する)や大衆芸術(=専門家と企業が合作し大衆が消費する)とは、

区別できると同時に連続してもあります。限界芸術に興味を寄せることは、芸術や文化の専門化・制度化・商業化に敏感になることでもあるのです。

授業の1つの柱は、オーソドックスではありませんが文献講読です。また、限界芸術のようなものを共同で制作し論評する、ということもしばしば行います。さらに、ミュージアムやその他のさまざまな場所へフィールドトリップを行うこともあります。このゼミの卒論では、各人の趣味など、その学生本人にとって思い入れのある題材が扱われる傾向があります。それらの卒論について近年特筆すべきは、〈持続可能なファン文化〉のあり方を探ろうという志向が見られることです。そこには、文化産業における人権侵害やファンによる誹謗中傷などの害悪が問題視されつつある中、これからのファンはどのように振舞うべきか、という切実な問題意識がうかがえます。この志向には大きな可能性を感じさせられます。



INTERVIEW | 学生の声

大学生活をかけて、自分の興味関心をとことん探究

私は、長い海外生活により自分の基盤となった「当たり前を疑う姿勢」や、幼い頃から芸能やエンタメに関わることにより感じた、「表」に立って見える世界と「裏」で支えてくださる存在の「裏表相互」の重要性について学びを深めたいと考え、鈴木慎一郎先生のゼミへの所属を決めました。ゼミでは、ブラックミュージックを中心とした音楽が「当たり前を疑う姿勢」や「裏表相互」の重要性を今も昔も伝えているという研究を行っています。

現在所属している音楽研究部やJAZZ研究部といった課外活動で触れる知識や経験もさらに深い研究へとつながっていると感じており、社会学部の学びにおいては、自分の関心を掘り下げる行動力も試されるのだと思います。



関西学院千里国際高等部出身
藤原 里音さん 4年

文化学専攻の卒業論文テーマ

- オタクの創作活動:グッズ作りの文化を紐解く
- 古着消費の実態:サステナブルファッションとの関連性を見る
- 異世界転生小説の流行に関する考察:テンプレートの需要と供給のされ方
- 映画業界における公共性とやりがい搾取:ミニシアターを事例として
- 「観察者」をよそおうファン:ゲーム実況者のファン文化の分析から
- 安楽死に対する日本の若者の態度
- なぜ私たちは動物が殺されることを嫌うのか?
- 「余暇」から立ち上がる「味」の深み:インド・ネパール料理店での経験から
- カワコ伝承と「福河童大明神」:隠岐の島町西郷の事例
- 「無形文化財」の創出と伝承:筑前博多独楽の事例から

先輩たちからのメッセージ

地域の人々と対話を重ね、共生にまつわる社会課題に向き合う

「地域資源を活用したまちづくり」をテーマに研究を進めています。尼崎市を拠点にフィールドワークを行っています。地域活動団体と活動する中で、子どもの地域への愛着が低いという課題を発見しました。地域資源をテーマにしたカルタを使って小学校で出前授業をしたり、地域で子ども向けのイベントをしたりして、地域資源に子どもたちが触れ、地域への愛着を持つ機会を作りました。社会課題を現地で感じ、解決のアプローチに挑戦できた、貴重な経験でした。

正解のない問いに向き合うことで、未来を切り拓いていきたい

課外活動では、ボランティアの活性化に取り組む団体「学生コーディネーター」の代表として活動しています。学内・外のたくさんの人と関わる中で度々感じるのは、一つの物事でも立場が変われば全く違った景色が見えるということ。これからも社会に溢れる答えのない課題に向き合い、どうすれば貢献できるのか、模索し続けていきたいと思っています。



京都府立桃山高等学校出身
佐藤 日和さん 4年



西宮市立西宮高等学校出身
笠井 萌さん 4年



上宮高等学校出身
吉田 玲音さん 3年

社会問題の背景に隠れた要因をデータの力で解明する

データという客観的な指標で社会を考察したいと考え、データサイエンスを学べるゼミを選びました。研究内容は、統計ソフト「R」を用いたデータ分析。口コミサイトやSNSから収集したリアルタイムデータでグラフを作成し、個々のデータの関係性を調査しています。研究を通じ、物事を表面的に捉えず、根本的な問題に目を向けられるようになりました。社会事象の因果関係を捉え、問題の背景に隠れた要因を探ることこそが社会学の醍醐味だと感じています。勉強以外で注力しているのは、ダンスサークルでの活動。ダンスをするだけでなく、場所取りや資料集めから舞台のデザインまで自分たちの手で行い、1から作品をつくりあげることに面白さを感じています。私が務めるサブチーフの役割は、準備を円滑に進めるための全体の調整です。多くのメンバーをまとめる難しさを感じることもありますが、綿密にコミュニケーションをとり、みんなが納得できる解決策を導き出すよう心がけています。

研究も部活動も、成功の鍵はコミュニケーション

ゼミでの研究テーマは「利用する人、しない人の違いは何なのか」。有線イヤホン为例に、利用の判断基準をグループで探究しています。さまざまな意見に触れられることがグループ研究の最大の魅力。多様な視点を柔軟に取り入れながら考察を進める中で、視野が広がり、俯瞰的に物事を捉えられるようになりました。ゼミではプレゼンテーションなど人前で話す機会が多く、分かりやすく伝える力も身についたと感じています。また、体育会ポート部の活動も私の大学生活において欠かせないものです。大学からポート競技を始めたため、入学当初は週6日間の練習についていくのに精一杯でした。しかし今では、空き時間に課題に取り組むなど、効率的に時間を使うことで、勉強と部活動を両立させられるように。活動を通じて心身が鍛えられ、日々の練習も楽しめるようになりました。ポート部での目標は全国制覇。仲間と積極的にコミュニケーションをとり、お互いを鼓舞しながら、鍛錬を重ねています。

熱中できる学びや部活動と出会い 大学生活がやりがいのあるものに



福岡県立筑紫高等学校出身
村上 晴飛さん 4年

私は入学前、自分の将来なりたい姿や学びたいことが一つに決めきれずたくさん事を学びたいという思いがあったため、さまざまな分野を幅広く学ぶことができる社会学部に入学を決めました。入学してからデータ分析の授業に興味を惹かれ、データサイエンスを学べるゼミへ入り、統計データやSNSデータを分析して社会調査を行っています。また、大学から出会った水球にも力を入れており、関西制覇を目指して日々練習に励みながら、学業と部活の両立をやりがいに感じ充実した学生生活を送っています。みなさんもぜひやりたいことを見つけて新しいことにチャレンジしてみてください！

地域交流や部活動で多くの人と出会い 新たな価値観を得られた



愛媛県立今治西高等学校出身
松木 一晟さん 4年

私は、まちづくりに関心をもっており、西宮市を拠点として学びを通じた地域交流活動を推進する「Machigaku」に参加しています。学びを企画・運営するコーディネーターとして携わり、受講者の想いや関心を学びに反映させることに取り組んだことで、私自身も人と人とのつながりを実践的に学び、新たな機会や価値観に出会い、同時に多くの成長を遂げることができました。また、硬式野球部にも所属し、チームの一員として多様な経験を積んでいます。「新しいことに挑戦したい」「多くの人とつながりたい」「現状に満足している今を変えたい」と考えている方には、多様な挑戦や出会いの機会が多い社会学部をお勧めします！

自由闊達な空気に満ちた社会学部で たくさんの「やってみたい」を実現



山口県立徳山高等学校出身
木下 弥鞠さん 4年

留学生の日本語学習や学校生活を支える「KGバディーズ」や「日本語パートナー」として活動するなど、国際交流活動に力を入れています。また、学内プログラムを通じて、オーストラリアの日系新聞社でのインターンシップに参加し、記事執筆や取材の実務経験を積みながら異文化の働き方に触れることで視野を広げ、英語力を向上させました。さらに、教員免許取得を目指した授業の履修や、大学祭の実行委員としても活動するなど、日々さまざまなことに挑戦しています。社会学部の、自由に挑戦を後押ししてくれる環境のおかげで、「やってみたい」を形に出来ていると日々実感しています！

学部での手厚い学びが 長期留学という大きな挑戦への後押しに



大阪府立豊中高等学校出身
谷野 紗良さん 4年

もともと大学生で留学したいという夢を持っており、同時に「当たり前を疑う視点」を学べる社会学に強い関心を持ち、社会学部への入学を決めました。長期間の留学経験がなかった私にとって、交換留学への挑戦には大きなハードルを感じていましたが、社会学部で開講されている『英語』で社会学を学ぶ授業や交換留学生と一緒に学べる環境は、日本に居ながら海外大学での学習を体感でき、留学挑戦への自信につながりました。加えて、当たり前を疑う社会的な視点は、留学先での文化や、自分の常識、偏見を疑うことができるという意味で、多文化理解にとっても役立つものとなりました。

国際寮で多文化共生に触れ 社会現象一つひとつへの理解が深まった



慶北外国語高等学校出身
(Gyeongbuk Foreign Language High School)
金 炫祐さん 4年

私は「異文化交流・理解」に力を入れるため、日本・欧米・アラブ・中華・東南アジアなどの学生たちが共に生活する国際寮へ入寮しています。生活や飲食を共にする中で感じたのは、本から得た情報や入寮前の想像以上に宗教による文化の違いが大きいということです。このような経験は、社会学部での学びにもつながるものです。社会学においては定量的評価も重要ですが、定性的評価も欠かせません。そのような定性的評価には、さまざまな人々との出会いや広い視野が必要です。一見重要ではないように思われる宗教や文化の違いに関する経験を通じて、世界全体の社会現象への理解がより深まっていると感じています。

失敗を恐れずチャレンジする姿勢が 新しい世界を見せてくれる



金沢大学附属高等学校出身
木村 京加さん 4年

私は社会学部で犯罪社会学や社会心理学、福祉社会学など幅広い分野に関心を抱いて学びを深める一方で、JAZZ研究会JAM(サークル)と文化総部ハーモニカソサイアティ(部活動)の二団体に所属し、入学当時は想像もできなかったようなたくさんのお好きな仲間や新しい世界に出会うことができました。0から始めてたくさん踊りたり転んだりしながらも、己の気持ちに素直に挑戦して発見できたとても美しく刺激的な音楽の景色を、私は生涯忘れられないと思います。みなさんもぜひ、恥じたり恐れたりせず心を開いていろんなところに飛び込んでみてください。きっと最高にわくわくする経験があなたを待っています。

卒業生が語る社会学部



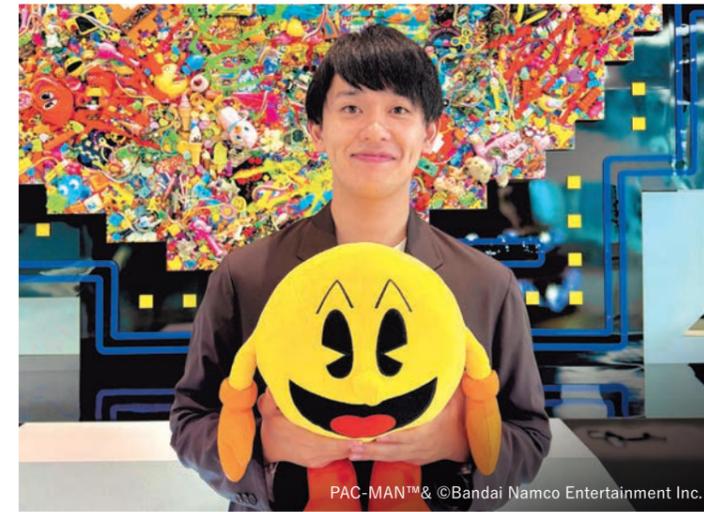
田中 友梨奈さん
関西テレビ放送

社会学部で培った 柔軟な視座を生かして、 人の心に響くような言葉を 発信していきたい

メディアを専門的に学びつつ、他分野も幅広く履修できることに魅力を感じ、社会学部を志望。オープンキャンパスに参加した際、スパニッシュ・ミッション・スタイルの美しい学び舎に感銘を受けました。時計台やチャペルを巡りながら、こんな素晴らしい環境で学びたいと強く思ったのを覚えています。入学後は民俗学やジェンダー、マーケティングなど広範にわたるジャンルの授業を履修し、2年生からは難波功士先生のゼミに所属。化粧品メーカーの協力のもと、男性向けコスメのプロモーションに取り組みました。実際のデータを用いた分析を行い、社会の需要がデータを通して可視化できる面白さを実感。社会学部で学んだことで、現代社会に対する理解が深まり、さまざまな角度から物事を見る力が養われたと思います。

現在は関西テレビに就職し、アナウンサーとして報道番組やバラエティ番組を担当しています。情報を得る手段が多様化する時代において、どうすればテレビに興味を持ってもらえるのか、試行錯誤の日々。番組と連動したSNS企画をしたり、番宣用の音楽を趣味のエレクトーンで作曲したり、自分なりの番組情報の発信に取り組んでいます。今後の目標は、高校時代に打ち込んでいた陸上競技にアナウンサーとして携わること。マラソンや駅伝で、選手一人ひとりの個性や人柄を伝えられるような実況をしたいです。台本がない実況では、ありふれた言葉ではなく、取材現場で感じたことを言葉にする力が求められます。まずは多くの取材現場で経験を積み、成長していきたいです。

社会学部の魅力は、個性豊かな学生が集まっていること。勉強や留学、部活動などそれぞれの目標に向かって努力する姿を見ていると、自然と自分も頑張ろうという気持ちになれたものです。特に就職活動中は、ゼミの仲間からの前向きな言葉に何度も励まされました。また、難波先生の紹介でメディア業界の卒業生とつながりができたのも、内定獲得の大きな助けに。今の私があるのは、社会学部でたくさんの人に出会い、多様な学びを経験できたからこそだと感じます。ぜひみなさんも、高校までとは異なる主体的な学びの場で、自分の興味関心を見つけ、打ち込んでみてください。その先に、広い世界が待っているはずです。



神原 基透さん バンダイナムコビジネスアーク

社会課題を探究する実践的な学びが 卒業後の豊かな人生へとつながる

私は入学後の授業を受ける中で都市社会学に興味を持ち、都市関係の研究ができるゼミに入りました。卒業論文もランドマークタワーについて執筆し、都市やまちづくりに関わる仕事をしたいと思い、神戸市役所に就職しました。現在は、神戸市を訪れる方の回遊性を高めるための取り組みや、阪神淡路大震災時のまちづくりの継承などに携わっています。授業のフィールドワークで学んだ「まちの特徴や課題を見つける視点」や、「明確な答えのない社会課題に対して最適解を求める社会学の姿勢」が、現在の業務に結びついていると感じます。

社会学は、実際の社会で起きていることを探究する学問だと思います。私自身、学生団体の活動やアルバイトを通じて、実際の社会に踏み出したことで多くの学びがありました。学生のうちに実際の社会に踏み出してみることで、その先の人生も豊かになっていくと思います。



船引 香歩さん 神戸市役所



大西 耕太郎さん 集英社

幅広い学びに触れられる環境が キャリア選択の大きな後押しに

社会学部で、集団と人の「つながり」を学んだことをきっかけに、身近な「つながり」を提供したいと思うようになり、辿り着いたのがエンタテインメント業界でした。エンタテインメントには、ゲーム、おもちゃ、アニメ、アミューズメント施設など、さまざまな形があり、また世界に向けた発信力も必要です。社会学部で培った「多面的に物事を読み解く力」は、さまざまな「つながり」を考え、業界の特性を分析しながら現場を支える業務に大いに役立っています。

私自身大学入学当初は、「自分は何を学びたいのか」「将来どんなことをしたいのか」が分からず、悩んでいました。社会学部では、幅広い知識を習得できるため、将来のキャリアややりたい姿を考える大きなヒントが得られるはず。私の経験や言葉が、みなさんの一歩を後押しする「つながり」になっていればとても嬉しいです…!

自分の興味関心と向き合う時間が 新しい価値創造の基盤になる

私はメディアビジネス部にて、主に集英社各メディアの広告セールスを行っています。広告主の多様なビジネスニーズに応えるため、ファッション編集者とともに動画を制作しSNSで拡散させたり、漫画IP(知的財産)を使って作家さんにオリジナルストーリーを作成してもらったり、時にはリアルなイベントで広告主の商品をサンプリングしたりもします。どうすれば、広告主の商品やサービスを一番魅力的に世の中に届けることができるのかを考える力が必要です。振り返ってみると、社会学部では、調査・インタビュー・フィールドワークなど、自分自身で計画し実行していく力を養うことができました。何よりも自分の興味関心に向き合っただけで学んでいけるところが、一番の魅力ではないかと今になって実感しています。みなさんも、素晴らしいキャンパスで、刺激に満ち溢れた社会学部ライフを存分に謳歌して頂くことを願っています。

社会学部は、**就職率99%以上**を維持する「就職に強い学部」です。

POINT1

マスコミ、サービス業を中心に 多様な業界で活躍

社会学部では、入学後に専攻分野を決めることができるため、自分の能力を生かせる業界や適性を自覚して就活に臨めます。

POINT2

主要企業 400社への就職率の高さ

関西学院大学のキャリア・就職支援のもと、多くの学部卒業生が、知名度のある主要企業400社への就職を実現しています。

主な就職先

製造業

カゴメ、旭化成グループ、キーエンス、日清食品ホールディングス、積水化学工業、住友電気工業、日本ハム、三菱ケミカル、日東電工、ハウス食品、エーザイ、パナソニック、森永製菓、第一三共、日立製作所、山崎製パン、ロート製薬、三菱電機、ロッテ、ライオン、村田製作所、キリンホールディングス、ブリヂストン、安川電機、サッポロビール、京セラ、スズキ、サントリーホールディングス、TOTO、ダイハツ工業、帝人、LIXIL、トヨタ自動車、東洋紡、神戸製鋼所、HONDA、東レ、JFEスチール、デンソー、ワコール、ダイキン工業、コクヨ、大日本印刷、三菱重工業、任天堂、凸版印刷、東京エレクトロン、バンダイ

金融業・保険業

日本銀行、静岡銀行、野村證券、日本政策金融公庫、中国銀行、ジェシービー、みずほフィナンシャルグループ、南都銀行、三井住友カード、三井住友銀行、福岡銀行、住友生命保険、三菱UFJ銀行、広島銀行、第一生命保険、りそなグループ、百十四銀行、大同生命保険、三井住友信託銀行、北陸銀行、日本生命保険、三菱UFJ信託銀行、山口フィナンシャルグループ、明治安田生命保険、池田泉州銀行、オリックス銀行、損害保険ジャパン、関西みらい銀行、楽天銀行、東京海上日動火災保険、京都銀行、SMBC日興証券、三井住友海上火災保険、紀陽銀行、大和証券、全国共済農業協同組合連合会

卸売業・小売業

豊田通商、三菱食品、セブン-イレブン・ジャパン、岩谷産業、トーハン、ファミリーマート、JFE商事、日本出版販売、高島屋、日鉄物産、ネスレ日本、阪急阪神百貨店、阪和興業、イオンリテール、ファーストリテイリンググループ、丸紅

運輸業

JR九州、全日本空輸、住友倉庫、JR四国、南海電気鉄道、三菱倉庫、JR東日本、阪急阪神ホールディングス、西日本高速道路、JR貨物、日本通運、阪神高速道路、西日本旅客鉄道

建設・不動産・リース業

鹿島建設、大和ハウス工業、住友不動産販売、住友林業、野村不動産、三井住友ファイナンス&リース、積水ハウス、阪急阪神不動産、オリックスグループ

マスコミ・情報通信業

NHK、読売新聞大阪本社、KDDI、TBSテレビ、講談社、ソフトバンク、日本テレビ放送網、東宝、日本IBM、朝日放送テレビ、電通デジタル、オービック、関西テレビ放送、電通西日本、楽天グループ、讀賣テレビ放送、NTTドコモ、サイバーエージェント、テレビ大阪、NTT東日本、バンダイナムコエンターテインメント、名古屋テレビ放送、

NTT西日本、ニフティ、産業経済新聞社、NTTコミュニケーションズ、マイナビ

医療・福祉・その他サービス

関西電力、船井総合研究所、帝国ホテル、四国電力、セコム、尼崎市社会福祉協議会、東京ガス、日本郵便、奈良県社会福祉協議会、アクセンチュア、リクルート、福岡市社会福祉事業団、アビームコンサルティング、オリエンタルランド、全国健康保険協会、デロイトトーマツコンサルティング、広島東洋カープ、日本年金機構

教育

大阪府教育委員会、兵庫県教育委員会、神戸大学、香川県教育委員会、福岡県教育委員会、関西学院、奈良県教育委員会、京都大学、公文教育研究会

公務員

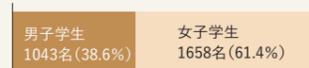
国家公務員、東京都、大阪市、国税専門官、鳥取県、京都市、大阪府、奈良県、神戸市、神奈川県、兵庫県、堺市、京都府、山口県、広島市

取得できる資格

- 教育職員免許状
 - 中学校一種(社会)
 - 高等学校一種(地理歴史)
 - 高等学校一種(公民)
- 社会調査士
- 認定心理士(心理調査)
- 博物館学芸員(任用資格)
- 学校図書館司書教諭
- 国際バカロレア教員認定証(DP)

社会学部のデータ (2024年5月時点)

在学生数(1~4年):2701名



専任教員数:51名

交換・中期留学者数:28名



社会学専攻

赤江 達也 教授

宗教社会学/歴史社会学/
日本キリスト教史

安達 智史 教授

社会学理論/移民・マイノリティ/
社会統合

石田 淳 教授

数理社会学

今井 信雄 教授

記憶/文化資源/社会構造

大岡 栄美 准教授

多文化共生/
ソーシャル・キャピタル/まちづくり

大和 冬樹 助教

都市社会学/居住格差/
近隣効果

奥村 隆 教授

自己と他者の社会学/
社会学理論/文化の社会学

金菱 清 教授

災害社会学/環境社会学/霊性論

貴戸 理恵 教授

子ども・若者/当事者/質的調査

金 明秀 教授

社会階層/エスニシティ/
ナショナリズム

倉島 哲 教授

スポーツ社会学/身体論/
太極拳/東洋医学

佐藤 哲彦 教授

社会問題/医療/
ディスクォーズ分析

鈴木 謙介 教授

グローバリゼーション/若者/
情報社会

関 嘉寛 教授

ボランティア/NPO・NGO/
公共空間

高原 基彰 教授

社会学/東アジア/
グローバリゼーション

高松 里江 教授

ジェンダー/ライフコース/キャリア

武内 今日子 助教

セクシュアリティ論/
クィア・スタディーズ/マイノリティ

立石 裕二 教授

科学技術の社会学/
環境社会学/リスクと不確実性

寺沢 拓敬 准教授

英語教育政策/言語社会学/
教育社会学

中野 康人 教授

数理・計量社会学/環境社会学/
規範と秩序

長松 奈美江 教授

階級・階層/所得格差/非正規雇用

村田 泰子 教授

ジェンダー論/家族社会学/
母親の社会学的研究

横田 伸子 教授

労働社会/労働とジェンダー/
東アジアの経済社会

渡邊 勉 教授

計量歴史社会学/社会的平等/
職業経歴

メディア学専攻

阿部 潔 教授

コミュニケーション/
公共圏/カルチュラル・スタディーズ

難波 功士 教授

広告/若者文化/社会史

福地 直子 准教授

カウンセリング心理学/
異文化間心理学/英語教育方法論

堀 あきこ 助教

ジェンダー・セクシュアリティとメディア

堀川 裕介 助教

情報行動論/社会心理学/
メディア社会

松井 広志 准教授

メディア論/ポピュラー文化/
ゲーム研究

森 康俊 教授

メディア効果論/
コミュニケーション/危機管理

社会心理学専攻

岩谷 舟真 専任講師

社会心理学/文化心理学/
暗黙のルール

小林 智之 准教授

社会心理学/集団間葛藤/差別/災害/
メンタルヘルス/コミュニティ形成

清水 裕士 教授

社会心理学/親密な対人関係/
道徳/社会規範

文化学専攻

内田 充美 教授

言語の変異と変化/コーパス言語学/
言語の対照研究

打樋 啓史 教授

初期キリスト教思想史/
聖餐論/スピリチュアリティ

Khavari Vivian 准教授

第二言語習得/英語教育/継承語学習

島村 恭則 教授

現代民俗学/ヴァンキュラー文化研究/
沖縄研究

鈴木 慎一郎 教授

ポピュラー音楽/
ミクロな文化実践とシステムとの関係

鳥羽 美鈴 教授

ヨーロッパ現代社会/移民・難民/
フランコフォニー(フランス語圏)

野波 寛 教授

社会心理学/環境問題/合意形成

森 久美子 教授

協力/意思決定/実験ゲーム

中谷 文美 教授

文化人類学/モノづくりと文化継承/
ジェンダーと労働

西村 正男 教授

近現代中国文学/中国メディア文化史/
日中文化交流

Benedict Timothy O'neal 准教授

宗教学/死生学/医療人類学

松宮 園子 教授

イギリス文学/イギリス文化/
モダニズム研究

李 建志 教授

朝鮮文化研究/複数のアイデンティティ/
近代文学研究

Hans Peter Liederbach 教授

日本社会思想/間文化的哲学/解釈学